

気象業務開始の経緯

1 御雇外国人からの気象観測の建議

明治政府は、明治 4(1871)年 7 月工部省に測量司を置き、東京府下の三角測量を始めましたが、測量師長はイギリス人のマクビーン (C.A.McVean : 明治元年に灯台建設のため来日、明治 4 年に工部省測量司に移る) で、測量助師はイギリス人ジョイナー (H.B.Joyner : 明治 3(1870)年に京浜間鉄道布設のため来日、明治 4(1871)年に工部省測量司に移る) でした。このジョイナーが気象観測の必要性を建議し、明治 6(1873)年 5 月工部省測量司は气象台を設けることを決めて、ロンドン气象台長に気象器械のあつせんを依頼しました。

マクビーン自身も測量器械購入と測量技師招へいのため、測量正河野通信に随行して渡英しました。マクビーンはフランスからイギリスに帰化したシャーボー (H.Scharbau) の日本招へいに成功し、そのシャーボーに気象器械の調達を依頼しました。シャーボーは 15 か月間にわたりイギリスで各種器械の購入にあたり、明治 7(1874)年 7 月それらの器械を携えて来日しました。シャーボーは「日本は地震が多いと聞いたが、測点が移動しては困る。日本で測量をするにはまず地震観測が必要だ。」と考え、イタリア製の地震計を気象器械とともに持参しました。

2 気象器械・地震計の据付けと観測の開始

明治 8(1875)年 5 月これらの器械を内務省地理寮構内 (現在の東京都港区虎ノ門 2-10 ホテルオークラ付近) に据付け、同年 6 月から観測を開始しました。当初は、御雇外国人ジョイナーが一人で担当して 1 日 3 回の気象観測を行い、地震があれば土蔵の中の地震計まで飛んで行きました。間もなく、ジョイナーの要請により、同年 9 月から正戸豹之助 (地上・山岳観測、通信等多方面で事業整備に尽力、のち中央气象台統計課長)、下野信之 (のち大阪測候所長)、中條信倫 (馬場と改姓、のち商船学校教授)、大塚信豊 (地震・火山業務を経て、長崎測候所長)、武林貞次郎 (のち長崎測候所長) らがジョイナーの伝習生となり、徐々に観測に加わりました。

その後明治 10(1877)年 6 月には、ジョイナーの満期解雇のあとをうけて正戸豹之助が観測主任になりました。なお、明治 16(1883)年 3 月 1 日に東京气象台で初めて天気図を作成し毎日の印刷配布、さらに翌年 6 月 1 日には毎日 3 回の全国の天気予報の発表を開始しました。

3 組織の変遷

気象観測を計画した工部省測量司は、明治 7(1874)年 1 月に内務省に移管され同年 8 月には内務省地理寮量地課と改称されています。日本の気象事業は、工部省によって計画され、内務省によって実現されたこととなります。

明治 8(1875)年 6 月 1 日、内務省地理寮量地課は東京気象台を設立し、中央気象台の基礎を作りました。気象記念日はこれを記念したものです。

その後、気象事業は明治 28(1895)年 4 月に内務省から文部省に移され、昭和 18(1943)年 11 月に運輸通信省、昭和 20(1945)年 5 月に運輸通信省が運輸省と逓信省に分かれたとき、運輸省所管となりました。

東京気象台は、明治 20(1887)年 1 月に中央気象台と改称、昭和 31(1956)年 7 月に気象庁となりました。平成 13(2001)年 1 月の中央省庁等の再編に伴い、気象庁は国土交通省の外局として新たに業務を実施しております。